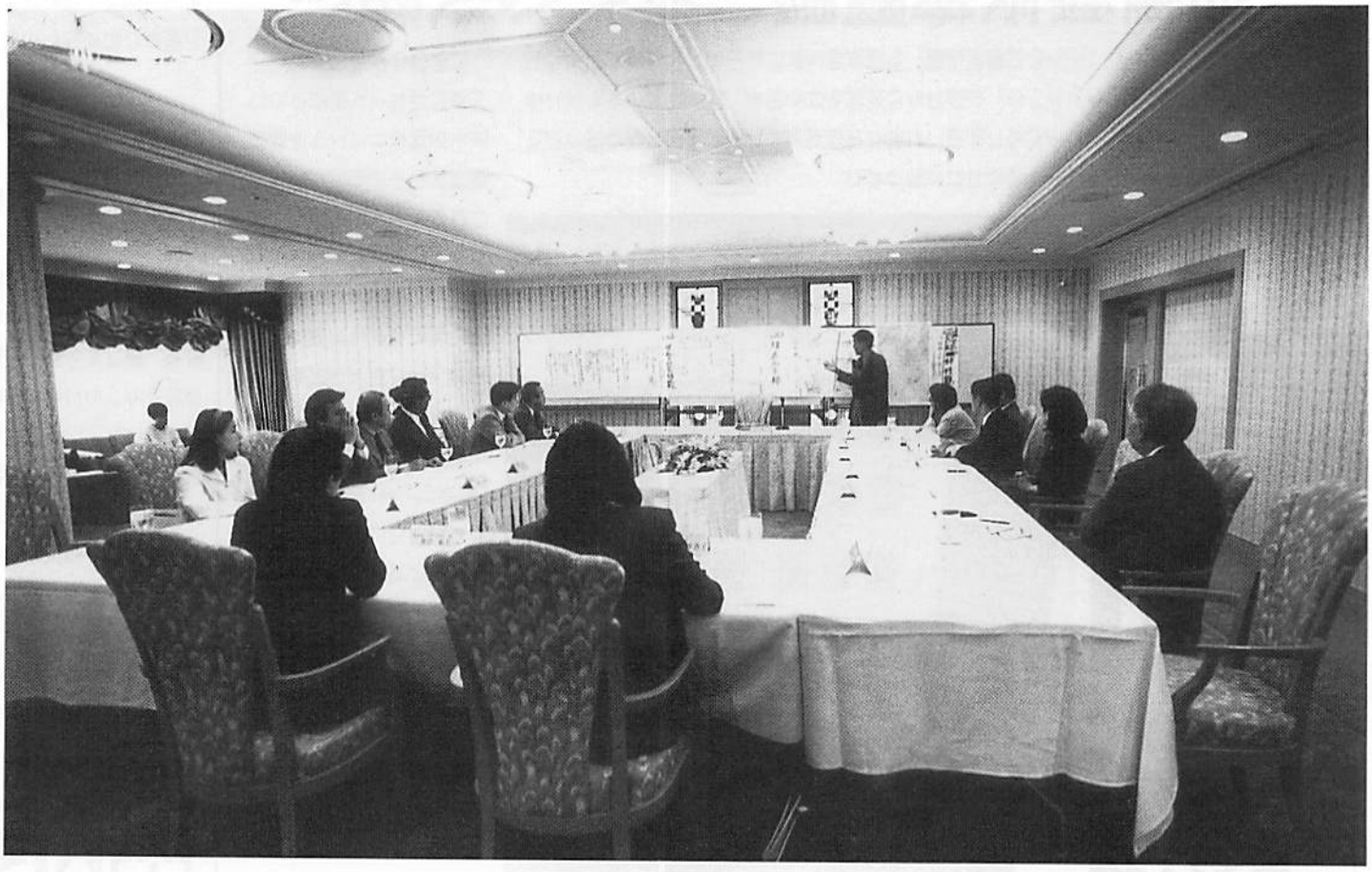
建都1100年は、時代祭りと平安神宮を残した。1200年は何を残せるか。



いにしえの京の都のなりたちは昔を今になすよしもがな

「高さ制限に関して条例をつくるのは簡単だが、自然の景観そのものに関して、人間が何かを言えるだろうか」景観論争をめぐる質疑応答で。

香山リカ先生のおかげで、ダブルバインド(二重拘束)という言葉がポピュラーになったが、都市もまた二重性に喘いでいる。京都でいつも問題になるのは「歴史と伝統VS超先端の進取の気性」の二重性。だがこれらの概念は必ずしも対立しないのではないか。

建都1200年を目前に、京都をめぐる議論や行動の気運が高まっている。9月28日、京都プライトンホテルで行われた「第二回京都BEWELLフォーラム～世界文化自由都市・京都－PAX京都マインド～」では、吉本隆明氏が基調講演。手書き文字や図解入りの模造紙を張り、京都の難しさを多面的に検証した。

そもそも京都が都として成立した平安朝とは、どんな時代なのか。日本人が日本的だと思ってきたことはこの時代以前より見返さなければならない。草木がもの言う時代から、自然を「四季のうつろい」ととらえる視点の誕生。都市の成立が人口過密を産み、過密が伝染病をもたらした。これに対抗する治療所として多数の寺社仏閣が乱立した。また、天皇を中心に、その外郭都市として発展した京都は、一般的な都市同様、農村から分化した商工業都市としての役割も担わねばならなかった。京都の商工業が、他の地方都市とちがって、産業別人口構成比などの数字からは読み取れない可能性を秘めているは、この故である。こうした役割の二重性から生まれたのが、今日の京都が抱える「伝統とモダニズム」問題なのだ。

血の通った二重性を古いか新しいかで分けようとするのは、「浮かないこと」だと吉本氏は嘆息。どこかにいい治療所はないかね？

360名の観客のほとんどは美容業界人。比叡山の夜は華麗に燃えた。

ごくフツーの日常に飽きたら いつもと違った風を求める

グラジュエイト・ボブは日本人に最も似合うボブのアレンジ。スタイルFは偶然の動きが美しい髪型。アンティーブは南仏の地がモチーフ。

不景気にも飽き、凶作にも飽きた。そろそろ美容院通いも解禁にしたい。そんな秋風吹く9月27日、比叡山ホテルでひとつのヘアショーが行われた。ACADEMY OF HAIR ETON CROP KYOTO受講生による93年度発表会である。メインテーマは、昨年から引き続き京都からの発信（TRANS MITTING from KYOTO）。昨年は初の試みにもかかわらず、METROに200人の観客を集めて大好評。2度目の今回、サブテーマはBREAK THROUGH（突き破る）。ふだん吸っている空気とは違った風を求めて、360人の関係者やファンが比叡山に吹き寄せられた。

各地でETON CROPを主宰する北川忠夫氏によると「美容師は忙しくて日常のルーティンをこなすのに一生懸命だけど、アーティストとしてのマインドをいつまでも失わずにいたい」とのこと。

ショーに先立つガーデン・パーティーでは、さすがに美容関係者ぞろいの小粋なお洒落ぶりを発揮。叡峰の間には定刻30分前から続々と観客が詰めかけ、素晴らしい熱気のうちに実行委員会の作品によるオープニング。3つの科にわかれた受講生たちがそれぞれ「グラジュエイト・ボブ」、「スタイルF」、「アンティーブ」をテーマに、1時間30分の華麗なドラマを展開した。後半では東京・名古屋・神戸で活躍中の現役技術者も登場し、自由テーマで日頃の腕前を存分に発揮。これからのネットワークに期待がもてる。エンディングではちょっぴりモスラを彷彿とさせるゴージャスな作品が、息を飲ませた。

ライター／大音美弥子